

日本図書館文化史研究会 ニューズレター

第81号 2002年8月8日

日本図書館文化史研究会

〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1

明治大学司書・司書教諭課程

郵便振替口座 00170-5-164973

(事務局)

小黒浩司

■■ 目 次 ■■

『図書館文化史研究』第19号（創立20周年記念号）について……………	2
『図書館文化史研究』第20号原稿募集のお知らせ	
日本図書館文化史研究会20周年記念研究集会・総会開催のご案内 ……	3
日本図書館文化史研究会2001年度活動報告（2001.4—2002.3）……………	7
日本図書館文化史研究会2001年度決算報告（2001.4—2002.3）……………	8
日本図書館文化史研究会2002年度予算（案）……………	9
日本図書館文化史研究会20周年記念事業予算（案）……………	10
『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領（案）……………	11
2002年度第1回研究例会報告……………	13
研究例会発表募集のお知らせ	
『ニューズレター』原稿募集のお知らせ	
運営委員会通信……………	19
次回運営委員会のお知らせ	
前回運営委員会の報告	
事務局だより……………	20
年会費の金額について	
会員動向	
研究会の居所が変わりました	

『図書館文化史研究』第19号（創立20周年記念号）について

2002年9月刊行
本文200ページ
本体価格 2,600円

機関誌『図書館文化史研究』第19号（創立20周年記念号）が、まもなく発行となります。会員の皆さまのお手元には、9月初旬にお届けできる見込です。

第19号は以下のような内容になります。ご期待ください。

■■ 目 次 ■■

序

- | | |
|-------|---|
| 石井 敦 | 発足までのこと—20年の歩みによせて— |
| 岩猿 敏生 | 日本図書館史の時代区分 |
| 藤野 幸雄 | 図書館史の方法について考えること |
| 石井 敬三 | 日本図書館文化史研究会と私 |
| 小川 徹 | 日本最古の図書館「書屋」について |
| 河井 弘志 | ヴァイマル時代の教養図書館：Gottlieb Fritzの公共図書館思想 |
| 川崎 良孝 | アラバマ州公立図書館サービス部長エミリー・リードをめぐる黒人問題（1959年） |
| 阪田 蓉子 | 司書養成と司書課程 |
| 志保田 務 | 「記述独立方式」と森耕一：非基本記入方式の成立 |
| 寺田 光孝 | 創立20周年に寄せて |
| 中林 隆明 | ボストンにおける二人のビゲロウ |
| 細井 岳登 | 地域のなかの射和文庫 |
| 山本 順一 | アメリカ公共図書館史にかかわる素描的点描 |

『図書館文化史研究』第20号原稿募集のお知らせ

機関誌『図書館文化史研究』第20号の原稿を募集します。
原稿の締切は2002年12月末日の予定です。ふるってご投稿ください。
なお、この件に関するお問い合わせ、ならびに原稿の送付先は別記事務局までお願いします。

日本図書館文化史研究会20周年記念研究集会・総会の開催のご案内

2002年度日本図書館文化史研究会研究集会・総会を、本研究会20周年記念事業のひとつとして、下記のように開催することになりました。多くの方々のご参加を期待します。

記

- 日 時 2002年 9月15・16日 (日・月)
- 場 所 アルカディア市ヶ谷 (私学会館)・法政大学
J R中央・総武線 (各駅停車) 市ヶ谷駅下車
地下鉄有楽町線・南北線・新宿線市ヶ谷駅下車
- 参加費 研究集会：会 員1,000円
非会員1,500円
記念パーティ：5,000円
- 申込期限 8月31日 (必着)
- 申込先 別記の事務局まで、郵便、ファックス、または電子メールでお申込みください。

第 1 日 記念シンポジウム・記念パーティ (会場：アルカディア市ヶ谷)

記念シンポジウム

1. 時 程 12:30～ 受付
13:00～16:30 シンポジウム
2. 場 所 アルカディア市ヶ谷 5階大雪
3. テーマ 「図書館文化史研究の回顧と展望」
4. 報告者 石井 敦、岩猿 敏生、藤野 幸雄 (五十音順)
5. 司 会 山口源治郎 (東京学芸大学)、山本順一 (図書館情報大学)

● シンポジウムの趣旨

1982年に、現在の日本図書館文化史研究会が「図書館史研究会」として発足したことは、わが国の図書館史研究史上、大きな意義をもっていたように思われる。それまで個々に進められ、個別に交流されていた図書館史研究活動が、全国的な組織として研究会が設立され、図書館史研究を専門とする発表の場と充実した議論と研鑽の場とをもつようになったからである。

そして研究会が発足して以降、毎年の研究集会 (図書館史を考えるセミナー、緑陰セミナー) においては、図書館史研究の基本的なテーマ、現代的なテーマをめぐって、若手、中堅、重鎮的な研究者や、図書館現場で働きながら研究を進め

ている図書館員研究者が、研究成果を発表し合い、活発に議論を闘わせ、研究活動を大いに刺激してきた。

そうした中で、研究会の機関紙『図書館史研究』をはじめ、図書館学関係雑誌にも会員の研究成果が多く発表され、蓄積されるようになってくるとともに、図書館学関係の学会賞、研究奨励賞などを受賞する水準の高い研究も生み出されてきた。

さて、図書館文化史研究が単に図書館に関する過去の出来事をなぞり懐かしみ、あるいは悲しむ営みではなく、図書館を文化の広がりにおいて捉え、時間軸において認識し、その本質を解明する営みであるとするなら、「図書館とは何か」ということが切実に問われる現在という時代においてこそ、図書館文化史研究の本領が発揮される必要があり、その課題にふさわしい骨太い研究が求められている。そしてこの骨太い研究のためには、研究を進めるための骨太い歴史認識や研究方法も切実に求められていると思われる。

そこで今回のシンポジウムは、戦後の近代日本図書館史研究において開拓者的役割を果たされてきた石井敦氏、図書館史研究の方法等において鋭い理論的な問題提起を行ってこられた岩猿敏生氏、比較図書館史研究において開拓者的な役割を果たされた藤野幸雄氏、という3人の先達を報告者としてお迎えし、図書館文化史研究の課題、方法、展望という点について存分に語っていただき、今後の研究会の活動に喝とエネルギーをいただこうというねらいである。

記念パーティ（懇親会）

1. 時 程 16:00～ 受付
16:30～19:00 パーティ
2. 場 所 アルカディア市ヶ谷 5階赤城
3. 形 式 立食（フリードリンク）

第 2 日 個人発表・総会（会場：法政大学大学院棟402教室）

※ 第1日目と会場が異なりますので、ご注意ください。

※ 昼食は、各自会場周辺でおとり下さい。

1. 時 程 9:30～ 受付
10:00～12:00 個人発表1・2
12:00～13:00 (昼 食)
13:00～15:00 個人発表3・4
15:00～16:00 会員総会

1. 個人発表

【発表1】 10:00-11:00

鈴木 守 (図書館情報大学大学院)

- 発表題名

アメリカ南部諸州における学校図書館サービスの発展：小規模校に対する学校図書館サービスの観点から

- 発表要旨

アメリカ南部諸州における学校図書館及び学校図書館サービスの発展について、両大戦間を中心に史的考察を行う。特に小規模校に対する学校図書館サービスの観点から、Southern Association of Colleges and Secondary Schools の学校図書館基準による標準化、Rosenwald 財団の援助によるカウンティライブラリーによる学校図書館サービス、Rockefeller 財団の援助による南部諸州のスクールライブラリースーパーバイザーの設置と学校図書館施策について考察を行う。

【発表2】 11:00-12:00

深井 耀子 (椋山女学園大学文化情報学部)

- 発表題名

リリアン・スミスの児童図書館論—トロント市立図書館年報・少年少女部部長報告の記述から

- 発表要旨

リリアン・スミス (1887~1983) は、児童図書館員のパイオニアである。1912年に少年少女部の部長として就任以来、40年にわたり年次報告に活動記録を執筆した。発表はその内容を照会しつつ、「児童文学論」(岩波書店、1964年)の著者として著名な彼女ならではの児童図書館論を、浮き彫りにすることをめざしている。

12:00~13:00 (昼 食)

【発表3】 13:00-14:00

篠原 由美子 (図書館情報大学大学院)

- 発表題名

小牧共立普通図書館 (長野県上田市) 設立の事情とその実態

- 発表要旨

小牧共立普通図書館 (設立時は小県郡小牧村のち上田市) は、蔵書2000冊に満たない小規模図書館である。明治末から昭和20年代まで利用された。本研究は、この図書館の設立の事情や図書館活動の実態を調査したものである。戦前の図書館のうち、優れた図書館活動に関してはある程度記録や調査報告があるが、当時大半をしめていた小規模の図書館や文庫についての実態はよくわからない。一つの図書館の具体的な姿を知ることによってその一端を知る手がかりとしたい。

【発表4】 14:00-15:00

田澤 恭二

● 発表題名

図書館施設としての和室について

● 発表要旨

日本の図書館は、明治以来原則として西洋式建築であり、床は基本的には土足で歩けるような固い材質で作られている。しかし、一部の図書館では、昔から部分的に和室（畳室）が設置されている。図書館の和室には、事務系和室と閲覧系和室がある。事務系和室には、戦前からの用務員室・宿直室などと、戦後1960年代以降に始まった職員休憩室・集会室などとの2系統がある。閲覧系和室は1980年代以降公共図書館で設置されるようになってきている。これらの和室の発生と変遷について、日本の住居文化と関係させて述べる予定である。

2. 会員総会

次のような案件のご審議を予定しています。多くの方のご参加をお願いします。なお、その他検討すべき議案があれば、事務局までご連絡ください。

議事内容

1. 2001年度活動報告 (2001.4-2002.3)

2001年度の本会の活動内容をご報告します。7ページの資料をご参照ください。

2. 日本図書館文化史研究会2001会計年度決算報告 (2001.4-2002.3)

2001会計年度の本会の決算をご報告します。8ページの資料をご参照ください。

3. 2002年度予算・活動計画 (案)

2002年度の本会の予算、ならびに活動計画を提案します。9ページの資料をご参照ください。

4. 20周年記念事業予算 (案)

20周年記念事業の内容と予算について、ご報告します。10ページの資料をご参照ください。

5. 『『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領』の見直しについて

『『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領』の一部改定を提案します。改定(案)を11~12ページに掲載しました。アンダーライン部分が、改定部分です。

日本図書館文化史研究会 2001年度活動報告 (2001.4-2002.3)

1. 第18回研究集会・総会の開催 参照：『ニューズレター』78 (2001.11)
日時 2001.9.8 (土) 13:00 ~ 9 (日) 15:30
会場 京都大学教育学部第一講義室
 - 総会では、次期運営委員の選出、活動報告の承認、学術会議への登録申請、20周年記念事業の推進などが決定された。
 - 2001.9.10 (月) には、オプションルツアーを行った。台風が接近する中で決行され、13名の参加があった。

2. 機関誌『図書館文化史研究』18 (2001.9) 刊行
各執筆者に抜刷約25部提供。

3. 会報『ニューズレター』の編集刊行
No76 (2001.5) 77 (2001.8) 78 (2001.11) 79 (2002.2)

4. 研究例会
関東地区例会
 - (1) 2001.6.16 (国立国会図書館) 参照：『ニューズレター』77 (2001.8)
宇治郷毅：国立国会図書館の現状と課題
小黒浩司：新カリキュラム下の図書館史教育：『日本の図書館情報学教育：2000』から
 - (2) 2001.12.15 (法政大学) 参照：『図書館文化史研究』19 (2002.9) 刊行予定
石井敦：図書館史研究会発足前後のいきさつ
 - (3) 2002.3.9 (法政大学) 参照：『ニューズレター』80 (2002.5)
松尾昇治：東京都中期計画と図書館振興策について
大沼宜規：帝国図書館と小杉文庫のことども

5. 運営委員会の開催
 - (1) 2001.5.10 (木) 京都タワーホテルロビー
 - (2) 2001.9. 8 (土) 京都大学

6. その他
会員数は、2001年3月末日現在で137名です。2000年4月1日現在の会員数は、140名でした。

日本図書館文化史研究会2001会計年度決算報告 (2001.4—2002.3)

[一般会計]

収入の部

前年度繰越金 (2001.4.1)	254,791.
郵便局貯金利子 (2001.4.1)	182.
会費 (年会費3000円) 納入 (振替)	387,000.
寄付 (研究集会、懇親会・二次会残金含む)	7,957.
<u>総計</u>	<u>¥649,930.</u>

支出の部

事務局費	10,605.
ニューズレター (No.72—75)	105,405.
機関誌編集・刊行費	254,915.
研究会運営費	4,902.
小計	(375,827).
積立金 (特別会計繰込み)	50,000.
次年度繰越金	224,103.
<u>総計</u>	<u>¥649,930.</u>

[特別会計：20周年記念事業積立金]

前年度 (2000) 繰越金	650,000.
2001年度積立金	50,000.
<u>総計</u>	<u>¥700,000.</u>

監 査 報 告

2001年度の監査の結果、帳簿の記入、事務処理が適正に行われていたことを報告します。

2002年4月6日

監事 井上靖代 印
監事 寒川 登 印

日本図書館文化史研究会2002年度予算 (案)

[一般会計]

収入の部

会費	390,000.	2002年度分 (3,000円×130人)
雑費	200.	
前年度繰越金	224,103.	
総計	<u>614,303.</u>	

支出の部

事務局費	135,000.	
会議費	10,000.	
消耗品費	15,000.	
通信費	25,000.	
口座払込負担金	10,000.	
交通費	25,000.	
事務局移転費	50,000.	
ニューズレター	140,000.	
編集発行費	80,000.	年4回
送料	60,000.	
機関誌刊行費	250,000.	『図書館文化史研究』No.19
発行費用	200,000.	買い取り費用・委託送料を含む
抜刷費用	50,000.	
		※ 増頁による価格増部分は20周年特別会計から拠出する → 20万円
研究会運営費	24,000.	
研究例会	11,000.	関東及び関西で年3回+α
運営委員会	10,000.	年4回程度
		※ 研究集会費用は20周年特別会計から拠出する → 20万円
積立金 (特別会計)	50,000.	
予備費	15,303.	
総計	<u>614,303.</u>	

[特別会計：25周年記念事業積立金 (2002-)]

20周年記念事業積立金の剰余金	200,000.
2002年度	50,000.
総計	<u>250,000.</u>

日本図書館文化史研究会20周年記念事業予算 (案)

1. 『図書館文化史研究』19号・20周年記念号(2002年9月刊行予定)の刊行

- 本文約200ページ(通常号比約100ページ増)
- 販売価格は2,600円程度か
- 刊行費用は40万円程度か
- 増頁による価格増部分は積立金から拠出する
 - 02年度通常会計から 20万円
 - 20周年特別会計から 20万円

2. 20周年記念研究集会の実施

- 支出見込 275,000円
 - 予稿集印刷費 55,000
 - 会場使用料 42,000
 - シンポ諸費用 93,000
 - 会場看板費用 10,000
 - テープ起こし 50,000
 - 事務局諸費用 25,000
- 収入見込 75,000円
 - 参加費 75,000 (参加者60名程度)

※ 特別会計から支出 250,000

3. 20周年記念パーティの実施

- 支出見込 260,000円
 - パーティ代金 245,000
 - 会場飾り花 15,000
- 収入見込 160,000円
 - 参加費 160,000 (参加者32名程度)

※ 特別会計から支出 100,000円

◎ 特別会計からの支出合計 50万円

※ 20周年記念事業積立金 70万円 (2002年3月末現在)

「図書館文化史研究」投稿規定・執筆要領（案）

応募資格等

- 1 日本図書館文化史研究会会員は投稿することができる。
- 2 応募原稿は未発表のものに限る。ただし口頭で発表し、これを論文にまとめたものは除く。

応募原稿等

- 3 原稿は完全原稿とする。ワープロ等を使用する場合、A4用紙（縦位置）、1行40字×40行・横書きの書式に設定する。手書きの場合は400字詰（20字×20行）原稿用紙を用いる。
- 4 枚数制限は特に設けないが、長文の場合2回以上の分載とすることがある。
- 5 凶版は占有面積1ページ分を400字詰原稿用紙3枚の割合で換算し、そのまま版下として使用できるよう鮮明なものを提出する。
- 6 原稿はMS-DOS標準テキストによるワープロ原稿が望ましい。
- 7 原稿には標題（外国語併記）、著者名（ローマ字併記）、および著者の所属機関名を記入した表紙を付ける。

原稿の提出

- 8 原稿はコピーを含め2部を提出する。なお、投稿原稿は返却しない。
- 9 原稿は書留により別記編集委員会に郵送する。ワープロ原稿の場合、掲載が決定次第、使用機器、ソフト名を明記した3.5インチのフロッピー・ディスクをあわせて提出する。
- 10 原稿の締切は、毎年12月末日（必着）とする。

編集委員会

- 11 原稿の採否は編集委員会が決定する。
- 12 編集委員会は原稿の内容・表現等について、著者に修正・書き直しを求めることがある。また、編集委員会で用字・用語等について、修正・統一をすることがある。

校正・抜刷

- 13 著者校正は初校のみとする。その際、字句の修正以外は原則として認めない。
- 14 著者には抜刷20部を進呈する。

体裁・表記

- 15 原稿の執筆は以下の要領による。
 1. 本文の見出し区分は、原則としてポイントシステムを使用する。

2. 句読点は「,」「。」を用い、各1字分をとる。その他の記号類も各1字分をとるが、点線 (……)・ダッシュ (—) は各2字分をとる。
3. 数字は引用文、および漢語の一部となっている場合を除きアラビア数字を用い、2桁以上の場合は1マス2字をあてる。
4. 外国語は慣用的呼称をカタカナで表記し、必要に応じて原綴を () に記す。欧文文字の大文字は、1マス1字、小文字は1マス2字をあてる。
5. 西暦年以外の紀年を使用するときは、必要に応じて西暦年を () に入れて併記する。
6. 本文中の引用文献のタイトルは、欧語の場合はその下にアンダーラインを引き、それ以外は『 』に入れる。
7. 本文中の論文等のタイトルは、欧文の場合は“ ”に入れ、それ以外は「 」に入れる。
8. 本文中の引用は、「 」、または“ ”に入れる。長文の場合は行を改め、本文より2字下げて記す。
9. 注は通し番号を付け、全文の末尾にまとめる。その際文献の記載については以下のように記載する。

[雑誌論文からの引用]

渡辺重夫「国民の権利としての図書館利用」『図書館学会年報』Vol.30, No.2, 1984.6, p.55.

Harris, Michael H. “The dialectic of defeat : antimonies in research in library and information science,” Library trends. Vol.34, No.3, 1986, p.515-531.

[図書からの引用]

永末十四雄『日本公共図書館の形成』日本図書館協会, 1984, 352p.

Newhouse, Joseph P. and Arthur J. Alexander. An Economic Analysis of Public Library Services. Lexington, D.C. Heath Co., 1972, p.120.

[以下7行を追加]

[インターネット上の情報]

石村恵子「電子図書館と著作権」『つくばね』[オンライン] vol. 23, no. 4, 1998.4

[引用1998- 9 - 7]

<URL:<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/tsukubane/2304/ishinura.html>>

International Council on Archives. ISAD (G) : General International Standard Archival Description [online] .Ottawa, ICA, 1994 [cited 1997- 9 - 2] <URL:<http://www.archives.ca/ica/isad.html>>

原稿の送付先

2002年度第1回研究例会報告

実施日：2002年6月1日

会場：同志社大学今出川キャンパス徳照館

【発表1】

森川 彰

- 発表題名
明治海軍の文庫
- 発表要旨

1. はじめに

我が国の図書館文化史研究に於て、戦後大きく立ち遅れた分野に旧海軍（陸軍）の文庫史がある。これには理由のあることながら、それにしても戦後半世紀を経た今日、これら文庫に関する論考、記事は寥として稀で、研究は未進と云わざるをえない。

果たしてそうなら、やがて図書館文化史そのもの、研究に影響を及ぼすことは間違いないであろう。遅れは取り戻されねばならない。これは、そのための一試論である。

2. 文庫の概要

『図書館ハンドブック』収録の「年表」には、「明治3年、海軍兵学寮文庫設置」及び「明治22年、海軍省海軍中央文庫官制公布・海軍図書管理規則制定」の2項目が見える。他の図書に収める「年表」の場合も、内容は大同小異である。つまり、海軍の文庫と云えばこの2文庫を指すと云う流れのあることがわかる。代表的文庫を掲げたと思えば、これはこれで納得出来るのであるが、こうした流れがいつ頃どうして出来たものか。

明治25年と云えば、周知のように日本文庫協会創立の年であるが、実はこの年、海軍部内に於ては既に9文庫を、より進んだ関係の下に組織していたと云う事実がある。それを示す史料が“Books in English Language”（『海軍図書目録 洋書の部』）で、明治26年、海軍文庫の刊行にかゝる。我が国最初の総合目録であり、且つ辞書体目録でもある。編纂の中心は中央文庫（明治26年「海軍文庫」と改称）で、協力した文庫は中央文庫を含めて9文庫に上る。次の通りである。中央文庫（明治22年、以下括弧内は文庫又は学校等の創設年を示す。なお識別上必要な場合を除き、文庫名に「海軍」の文字を省略する。）、大学校（明治21年）、兵学校（明治3年）、軍医学校（明治6年）、主計学校（明治7年）、水路部（明治4年）、横須賀鎮守府（明治9年）、呉・佐世保各鎮守府（明治22年）の各文庫である。

以上の9文庫が、当時の海軍における文庫の全てではないが、主な文庫であったことは疑いない。少くとも、総合目録の編成に協力可能なレベルにあったわけである。因に、終戦後これら文庫の蔵書がどうなったか気になる所であるが、共通して云えることは、先ず機密文書・図書は焼却され、巷間に流れたもの、行方不明のも

の等を除く残部の蔵書が、夫々図書館を求めて移管された。『海軍文庫月報』no.1：昭和55年6月（この文庫は戦後生まれたもので、旧海軍文庫とは異なる）に、その数例が紹介されている。例えば旧海軍文庫蔵書の場合は、防衛庁防衛研究所図書館と東京大学へ、又大学校文庫蔵書は東京都立中央図書館へ移管され、今日に至っている。

ところで、上記以外にどんな文庫があったか。未詳の部分が多いが後述する「海軍図書管理規則」第2、3条に蔵書を有する部署名が列記されていて手掛りを得ることができる。

3. 『図書館雑誌』の記事と文庫

明治海軍の文庫に関する記事、論考等載せるものに、戦前の『図書館雑誌』がある。該当するタイトルは凡そ次の如くである。列記して置こう。

- (1)「日本文庫協会沿革」他（第1号：明治40年10月，第2号：明治41年2月）
- (2)「本会二十年間の回想」（第18号：大正2年9月）
- (3)「洋式図書館の嚆矢」（第63号：大正13年11月）
- (4)「明治初代の海軍兵学寮文庫に就て」（同上）
- (5)「懐古座談会」（第134号：昭和6年1月）

これを通観するに、凡そ二つのテーマに分けることが出来る。一つは兵学寮文庫についてであり、いま一つは、日本文庫協会の創立とその展開に係わった中央文庫員、大学校文庫員の活動についてである。前者に関しては、拙論「海軍兵学寮文庫の創設」（『同志社大学図書館学年報』27号別冊 2001年6月）をも参照いたゞきた度く、今は省略に従う。

後者に関しては菅野退輔、錦織精之進（中央文庫）、伊東祐毅（大学校文庫）の名を挙げて、協会設立の準備会への参加、設立後の幹事役、講習会における講師から辞書体目録の編纂、そして機関誌の発行を強く主張するなど、多彩な活動振りが紹介されている。海軍の枠内に止まることなく、それを超えて広く我が国図書館界の形成に一役買った自由な活動には、注目すべきものがある。

4. 海軍中央文庫

明治22年4月、勅令55号によって中央文庫が生まれた。それが海軍文庫と改称される迄僅か4年と1か月であったが、その間、明治海軍の文庫の基本を作り、且つ種々の活動を試みて、文庫のみならず図書館界に対しても寄与するところがあった。以下官制の内容と総合目録の編纂に分けて考えてみたい。

(1) 海軍中央文庫官制

内容に入る前に、この「官制」が何故明治22年の公布となったのか、その由来を考えてみるのは強ち無駄な話ではあるまい。思うに、太政官文庫の設置と、それは深く係わるのではあるまいか。

『内閣文庫百年史』増補版の「年表」に依れば、明治17年1月24日の条に「太政官文庫設置（太政官達第11号）、各官庁（陸海軍省等一部除外）所蔵の書籍一切同文庫で蒐集管理することを公布」と見えているのが、それである。つまり、太政官文庫設置を機に蔵書移管を除外された海軍省としては、自ら文庫組織確立の必要に

迫られたものと考える。

さて、全5条からなるこの「官制」は、中央文庫の設置と経営の基本を示すものであるが、第3条に「海軍中央文庫主管ハ図書ノ蒐収保存分類整頓其他一切ノ事ヲ掌理ス」と規定している。それを基に「海軍図書管理規則」(明治22年9月、達第168号)を定め、いわゆる中央図書館制を採用、図書資料は分散保管、情報は全て中央文庫に集中するという体制を造り上げた。海軍の場合は(陸軍も同様であるが)鎮守府、兵学校等全国的に分散立地する点を踏まえ、太政官文庫の思想とや、異なる現実的、且つ合理的手法によったと云うべきであろう。

(2) 総合目録の編纂

前にも触れた“Books in English Language”が、我が国初の総合目録、且つ辞書体目録でもあることを早く紹介したのは、安達将孝著「海軍文庫沿革概要」(『軍事史学』第30巻第2号：平成6.9)であるが、若干これに付け加えて置きたいことがある。

第1は、これには前段階と見るべき目録の存在することである。『諸官庁所蔵洋書目録 法律之部・経済之部』太政官記録課編(2冊)で、明治15年の刊行にかゝる。これについて前記『内閣文庫百年史』は「一種の総合目録」と評価している。中央文庫の菅野・錦織両名は、これを見たこと疑いない。その上で竿頭一步進めたものと思われる。

第2は、辞書体目録形式を採用した点であるが、この形式については西村竹間の『図書館管理法』明治25年刊に、字書体目録として紹介され、それが初期の文献と云われている。だが、同年既に編纂されていたことは記憶されてよい。C.A.CutterのRules for a dictionary catalogueは、1876年版1891年版の2種を備えていたのである。Library journalも購入していた。

5. 結びに代えて

海軍の文庫については、未詳の部分が多い。明治26年以後中央文庫は海軍文庫に改称されるが、管轄は海軍省から軍令部へ、又軍令部から海軍省へと度々変更した。蔵書に対する意識の変化もある。大学校文庫は学校の文庫中尤たるものであった。鎮守府文庫の中断等の問題もある。図書館長である文庫主管、文庫員としてどのような人がいたのか。取り分け図書館界との関係がどう変化していったのか。今後の研究に俟つところが大きい

(明治海軍の文庫・資料)

(1) 海軍中央文庫官制

明治22年4月20日(勅令55)

改正 明治23年10月 247号 26年5月 勅令49号廃止

第一条 海軍中央文庫ハ海軍参謀部ニ属シ、海軍ニ必要ナル図書ヲ蒐集保存スル所トス

第二条 海軍中央文庫ニ左ノ職員ヲ置ク

主管 一人 大尉

第三条 海軍中央文庫主管ハ、図書ノ蒐集保存分類整頓其他一切ノ事ヲ掌理ス

第三条 本職アル士官士官相当官及技師主理教授ノ内若干人ヲ海軍中央文庫掛トシ、各科ノ図書類別存廃ノ事ニ於テ主管ヲ補助セシム

第五条 文庫ニ主管ノ外判任官若干人ヲ置ク

(2) 海軍図書管理規則

明治22年6月7日 (海軍省達186号)

改正6月21日 (一部)、27年2月 (改訂)

大正14年9月1日 (一部)

第一条 海軍図書ノ総目録ハ、中央文庫ニ於テ整理ス

第二条 学校水路部練習艦作業費庁ヲ除クノ外各庁各艦ノ図書ハ、左ノ區別ニ依リ中央文庫鎮守府文庫ニテ管理ス

一、 東京府下ノ各庁ノ図書参謀部ノ秘密
図書ヲ除ク

二、 鎮守府管区内各庁各艦ノ図書参謀長所管ノ
秘密図書ハ除ク各鎮守府文庫

第三条 学校水路部練習艦作業費庁各鎮守府文庫ニ於テハ、毎年一回図書増減表ヲ作り中央文庫ニ送致スヘシ

前項外各庁ニ於テ所要ノ図書ハ、中央文庫又ハ鎮守文庫ヨリ借用スヘシ、文庫ニ其図書ナキトキハ之ヲ購買シ一旦中央文庫或ハ鎮守府文庫ニ納ムヘシ

第四条 練習艦ヲ除クノ外各艦所要ノ図書ハ、鎮守府文庫ヨリ渡シ付キ解役ノトキ返納セシムヘシ

【発表2】

工藤 一郎 (大阪学院大学)

- 発表題名
17世紀書物を読む人々の世界
- 発表要旨

序

資本主義の萌芽といわれるように、貨幣経済が進展し、揚州・蘇州・杭州・南京など大都市が成立し、商人と儒者の関係が流動的になる。北方の中央文化に対する批判的な精神が、王学左派の王心斉 (1483-1541)、李贄 (1527-1602) などにみえるように、儒教倫理を旨とする旧来の士大夫官僚に対する在野の知識人が誕生した。かれらの趣味生活や読書生活をスケッチする。

1 癖=趣味のある生活

沈周 (1427-1509) のつぎの世代に呉中才子と呼ばれる文人、祝充明 (1460-1521)、唐寅 (1470-1523)、文徽明 (1470-1559)、徐禎卿 (1479-1511) などや、風水、占術、音楽、出版などのさまざまな技術に携わる山人などがいる。

陳繼儒 (1558-1639)、施紹 (1581-1640)、李茂春などの花癖、袁宏道 (1568-1610) の青蛾癖、張岱がのべた祁子祥のように「書画癖、蹴鞠癖、鼓癖、鬼戯、園癖」オールラウンドの趣味人玩物喪志

張岱 (1597-1684) 『五異人伝』に

「癖のない人とは交際すべきではない。そういう人には深い情がないからである。疵のない人とは交際すべきでない。そういう人には真の気がないからである」と。この「無癖」「無疵」の人と対局に生きる人々、とりもなおさず趣味に生きる人物である。

あるいは、張潮『幽夢影』(六則)にいう。

花は以て蝶なかるべからず。山は以て泉なかるべからず。
石は以て苔なかるべからず。水は以て藻なかるべからず。
喬木は以て藤蔓なかるべからず。
人は以て癖なかるべからず

その理想体は、以下にみるがごとくである。

華亭莫雲卿 (1552-1587) 『雲卿筆塵』に

古梅花放くとき、磬石以て彝鼎器を置く
焚香点茶して内典素書を開き之れを読む
正に百才の老人に共うに似たり
塵談霞外の事を捉う

2 山水＝庭園サロンに集う人々

洪武から正徳 (1368-1506) の明朝初期、政府は厳密な封建体制をしいた。人口流動の統制、職業移動の禁止、游惰の取締などである。

錢謙益 (1582-1664) 『列朝詩集小伝』にその例をみる。たとえば、宋懋澄の山水の趣味は、一旦興が湧いたら、風雨波濤をもものともせず、昼夜をわかつまっしぐらで、自身「宜水宜山一道人」と称し、自然との心霊交感をする。

なかには、「詩文亦因以日進」という袁中道 (1570-1623) のような人物がいる。かれの『珂雪齋遊居柿録』に「名山勝水、以て俗腸を滌浣すべし」とある。またこの時代は、陶淵明がよく読まれた。かれは「庵を結びて人境にあり、しかも車馬の喧まびすしさなし」という。つまり市隱の誕生である。士大夫たちは造園、飲酒賦詩の結社に熱中した。呉綺 (1619-1694) の種字園、東魯古狂生『醉生石』第一、明末吳中文苑の沈周 (1427-1509)

3 修身から快樂のための読書へ

「門を閉じて客を謝し、ただ文を以て自ら娛しむのみ。あに何を傷むことあらんや」という態度で世の中に対処した『媚幽閣文娛序』(『皇明小品一六家』)。また陶淵明『五柳先生伝』「常に文牽を著すは、自ら娛しむのみ」。李贄『統焚書』(与袁石浦)、「大凡我書、みな是れ自己の快樂ために求むるなり」とある。小隱は山林に隠れ、大隱は朝市に隠れるほかに、古人にはまた書籍に隠れ、官吏に隠れ、酒に隠れ

る(王康『反招隠詩』)とはよくあるが、衛泳『悦容編』(招隠・達観)のように女色に隠れるのも表れる。

祁承燦(1563-1628)のように合轍社や読史社のような盟社を作って読書し、校訂し、書物の研究会のような真面目な結社もあった。馮聞之、趙玄度一見優雅そのものにみえる彼らも劉義慶『世説新語』と同様な時代閉塞の状況下の明末文化人たちは、日常些事にその意を寓した。30年代の抗日戦下の周作人や林悟堂の小品文運動も明末万暦の世情下と軌を同じくする。張岱や凌蒙初(1580-1644)の最後。

参考文献(略)

拙論 鄭振鐸の目録学と搶救民族文献、徽州版画隆盛考、孫從添『蔵書記要』訳注
(1) (2)

研究例会発表募集のお知らせ

本研究会では、毎年度3回(6月頃、12月頃、3月頃)に研究例会を実施しています。研究例会での発表を希望される方は、次の各項を明記して、別記の事務局までお申し込みください。

- 氏名(所属)
- 連絡先(住所、電話、メールアドレス等)
- 発表題目
- 発表要旨(200字程度)
- 発表時間(通常質疑応答を含め1件1時間程度)
- 発表希望場所(例:関東、関西)

『ニューズレター』原稿募集のお知らせ

ニューズレターの原稿を常時受け付けています。

次号(82号)掲載を希望される場合、9月末日までに別記事務局まで原稿をご送付ください。

今後ニューズレターで、図書館文化史研究に関わる文献・情報を速報していきたいと思えます。会員・非会員の問わず、関連業績を事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願いします。

運営委員会通信

■ ■ 次回運営委員会のお知らせ ■ ■

次回運営委員会を、下記のように会員総会に引き続いて開催します。本研究会の運営に興味・関心のある方は、是非ともご参加ください。なお、当日ご都合の悪い方は、事務局まで郵便、ファックス、または電子メールで、ご意見、ご希望等をお寄せいただければ、運営委員会で検討いたします。

記

- 日 時 9月16日(月) 16:00~17:00
- 場 所 法政大学大学院棟402教室
- 内 容 1. 20周年記念事業報告
2. 日本図書館文化史研究会規約の見直しについて
3. 次回例会について

ほか

■ ■ 前回運営委員会の報告 ■ ■

実施日：2002年6月1日

場所：同志社大学今出川キャンパス徳照館

以下のような事項について協議を行いました。

1. 日本学術会議学術研究団体登録について
2. 20周年記念事業について
3. 『『図書館文化史研究』投稿規定・執筆要領』の見直しについて
4. ニューズレターの発行について
5. 次回研究例会について
6. 新入会員

事務局だより

■■■ 年会費の金額について ■■■

ニューズレター前号に、年会費の金額を記載しなかったため、会員の皆さまにご迷惑をおかけしました。深くお詫び申し上げます。

年会費の金額は、3,000円となっています。よろしく申し上げます。

なお、振替口座を変更しましたので、旧振替用紙は使用しないでください。

※ 住所変更等がありましたら、お早めに事務局へご一報ください。

■■■ 研究会の居所が変わりました ■■■

事務局の交代にともない、研究会の居所が変更になりました。研究会に関するお問い合わせなどは、下記事務局までお願いします。

- 対外的窓口 : 〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1
明治大学司書・司書教諭課程
- 事務局 : 小黒 浩司